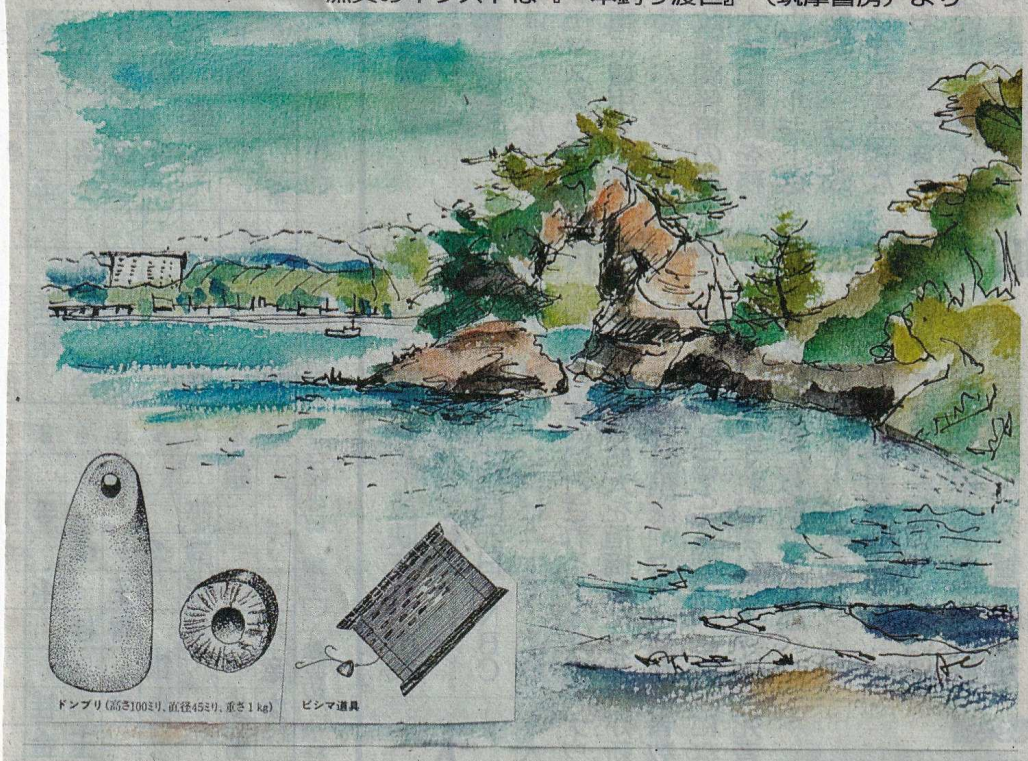
最後の紀州漁民ふたり

絵と文・熱田親憲　題字・熱田秦華

紀伊・房総

くろしお物語 ◇9◇

千葉県勝浦市の松部漁港付近の風景
＝漁具のイラストは『一本釣り渡世』（筑摩書房）より



今回は前回（2020年11月30日掲載）に引き続き、紀州漁民に学びながら千葉・勝浦で活躍した昭和初期の漁師、石橋宗吉の話です。

イカやタコ、タイの一本釣りを志向していた宗吉は昭和6（1931）年、30歳のとき勝浦沖に見慣れぬ2トン半の和船型漁船を発見した。無視したふりをして船に近づいてよく見ると、4人の乗船者が正座をして魚をつめて付ける。すると、真っすぐに底に行くので、素直に当たりが取れる――。紀州・雑賀崎のタイ釣り名人、中口佐市は穏やかな口調で説明してくれた。宗吉はすっかり感心し、勝浦のタイ釣り道具を全てビシマ道具に変えてしまった。

技法研究 余念なく

3年後、また勝浦沖に佐市の船・善栄丸が紀州から現れた。漁場に着くとすぐ船から石を海に放り込み、泡が湧くとタイが釣れ出した。宗吉は、その光景に釘づけになった。この漁法は、ドンブリ釣りという技法。佐市は更に工夫を凝らして、泡がたくさん出るように中をくり抜いた釣鐘型の鉛を10メートルのロープに結び、船のオモテから水面に投げ下ろした。水中からの泡立ちに誘われて浮上してきたタイを、餌のついた道具で釣り上げる仕組みである。宗吉は、その漁法に倣って試行錯誤の末、撒き餌をして翌日釣る「ふかし釣り」を編み出した。漁法とは釣る魚と漁師の知恵比べだと思える。だから、釣りを趣味にされている方は止められないのではないだろうか。

佐市は沖の黒潮と水温の低い瀬寄りの水域とでできる潮目が、タイの漁場となることを知っていた。房総沖のタイ漁場ほど豊かな漁場はないと絶賛し、紀州・雑賀崎から家族を呼び勝浦の住人になった。

佐市は1892（明治25）年生まれ。82歳で他界し、勝浦市鵜原の真光寺に眠っている。同市に住む孫の勝さんに伺うと、「祖父は大工仕事が得意だった」と言う。恐らくタイの習性とその対応の研究に余念がなかったと思う。

佐市に続いて紀州から勝浦経由で大原の住人になり、「遊漁船」を始めて大成功した中井丸一という人もいる。紀州船は漁具、漁法ばかりでなく、観光の釣り船でも先べんをつけたのだ。紀州漁民は研究熱心で、漁業のハード面でもソフト面でも優れていたと推測される。次回は中口佐市の眠る真光寺を訪ねようと思う。